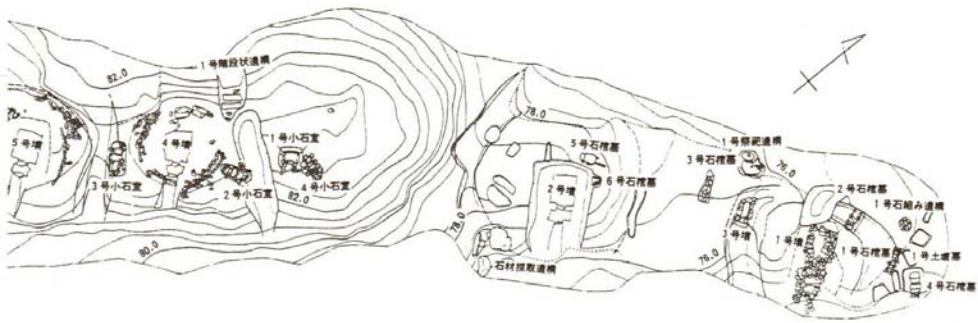


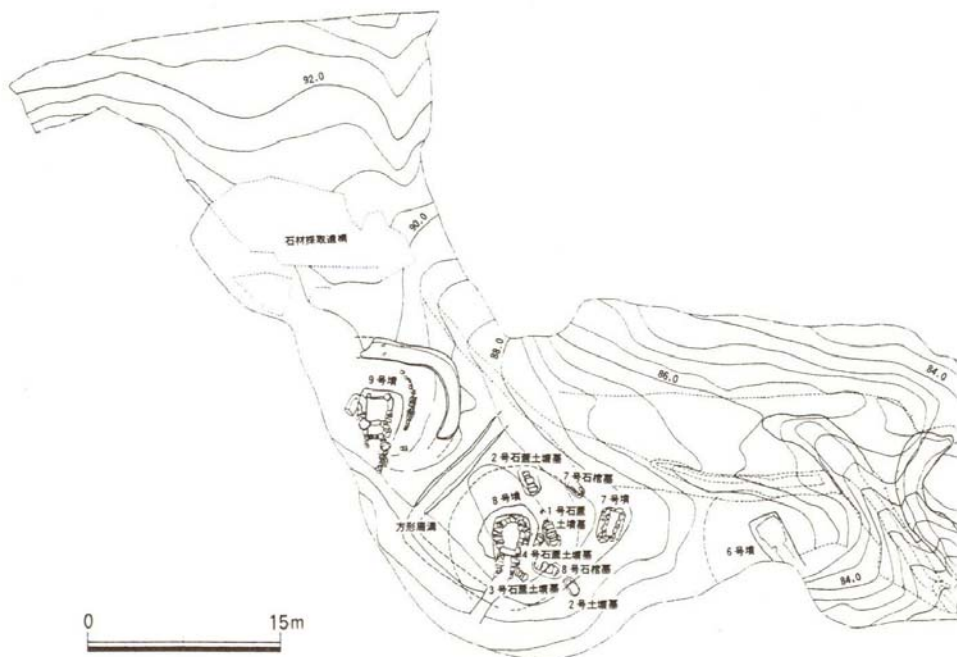
第35図 北垣遺跡全体図



次に、後期後半を中心とした時期では、集落としての性格と墓地としての性格がみられる。各遺構の分布状況を見ると、集落を構成する方形竪穴住居跡が調査区全域に広がるのに対して、墓地の埋葬施設のうち成人墓は調査区南部に集中する傾向がある。方形竪穴住居跡の構造は、基本的に床面が長方形の平面形態をなし、中央部に炉を設け、その両側に計二本の主柱穴を配し、長辺の一辺の中央部に屋内土壙を持ち、長短辺の一部にベッド状遺構を伴う。

五 北垣遺跡

北垣遺跡は豊津町の南端で、祓川の西側の丘陵上に位置する。松と広葉樹と一部に竹が自生する雑木林であるこの丘陵は、頂上部では標高二〇五メートルを計り、東側の眼下には祓川の沖積平野が広がっている。遺跡が所在する尾根の最高部は標高九五・五メートル、尾根線上の低い部分でも七五・五メートルを計り、平野部と



は一五〇三五^{トイ}の比高差がある。

節丸地区では、弥生時代の遺跡は遺物の散布地を除くと、近年まで内容の明確な遺跡はほとんど知られていなかった。しかし、祓川西側の沖積平野は古代の条里の痕跡がよく残っており、弥生時代においても水田として開発されていたと推定される。当遺跡の所在地は大字節丸字北垣である。

調査経過と遺跡の概要 調査の契機は、祓川右岸堤防上を走っていた県道行橋・山国線（現国道四

九六号）の道路改良工事であった。この道路は当遺跡が立地する小丘陵を縦断するルートに設定されていたため、当遺跡は完全に破壊されることとなった。このため、豊津町教育委員会は福岡県教育庁京築教育事務所と協議のうえ、当遺跡の北半分を平成二年度に、また半分を平成五年度に調査することとなった。

当遺跡は、従来から北垣古墳群の所在地として知られており、この古墳群の調査が主たる目的であっ

た。しかし、調査を開始して表土をはいだ時点で石棺墓や土壙墓が検出され、古墳群の築造に先行して、弥生時代の墓地が営まれていることが判明した。このため、弥生時代の墓地関連の遺構の調査は、古墳の発掘と並行しながら、古墳の盛り土除去後に残りの埋葬施設の発掘をすることとなった。なお、周辺の弥生時代の遺跡としては、当遺跡の南側で、犀川町との境をなす丘陵上に、集落跡である羽熊遺跡が調査されている。調査の結果検出した弥生時代の遺構はすべて中期から後期に属し、石棺墓八基・石蓋土壙墓四基・土壙墓二基のほか、これらの埋葬施設の一部を囲む方形周溝や祭祀遺構などが検出された(第35図参照)。

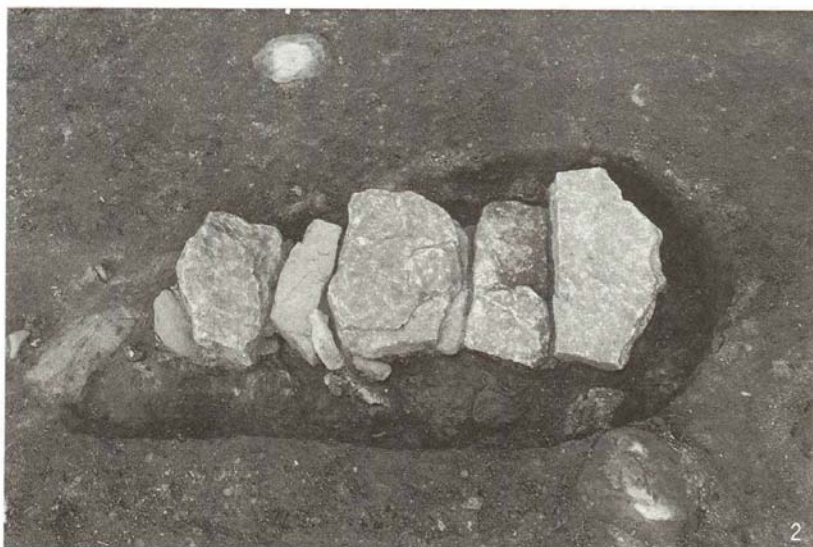
遺構の詳細

弥生時代の埋葬施設は、北側の尾根先端部と、南側で尾根筋が屈曲する部分とに集中する傾向がある。標高は北側の部分で八九^{メートル}前後、南側の部分で七六^{メートル}前後である。

各遺構のうち、ここでは8号石棺墓と2号石蓋土壙墓についてのみ詳細に述べる。8号石棺墓(第36図1)は、調査区南部で丘陵本体が東方から北方へと屈曲する部分の頂上平坦面に位置し、標高は八八・七〇^{メートル}前後である。当石棺墓の墓壙は、長さ二・四八^{メートル}、幅一・三四^{メートル}の長楕円形の平面形をなし、深さは〇・七二^{メートル}である。石棺は右側壁が四枚、左側壁が五枚の立石をやや内傾させて並べ、頭位・足位の小口石は両側壁に挟まれる。蓋石は四枚のやや大形の花崗岩の板石を並べ、足位のすき間を小形の石で埋めている。また、側壁や蓋石のすき間には粘土で目張りを施し、床面には赤色顔料を散布する。棺内の規模は長さ一・七〇^{メートル}、幅〇・三二^{メートル}、深さ〇・四七^{メートル}である。主軸の方位はS^{63°}Wである。遺物は棺内の右足脛部の付近から鉄鏃二本が出土している。

2号石蓋土壙墓(第36図2)は、8号石棺墓の西側約六^{メートル}に位置し、標高は八九・〇^{メートル}である。墓壙は二

第3章 弥生時代



第36図 北垣遺跡弥生時代埋葬施設発掘状況
1. 8号石棺墓
2. 2号石蓋土墳墓

段掘りで、まず長さ二・三^{メートル}前後、幅一・四〇^{メートル}の長楕円形で、深さ〇・二六^{メートル}以上の横を掘り、その中央部に棺を掘り込んである。棺は頭位小口に一枚石を立て、足位側の壁は傾斜をつけている。床面は長さが一・二一^{メートル}で、幅は〇・二五^{メートル}と非常に狭い。蓋石は五枚の板石からなり、すき間は小形の石材でふさいでいる。主軸の方位はS—79—Wである。

これらの埋葬施設のうち、調査区南部の丘陵屈曲部に位置する石棺墓二基・石蓋土壙墓四基・土壙墓一基の一群を区画するように、南西と南東の一部で、直交すると推定される溝が検出された(第35図参照)。これは全体として方形周溝墓をなすものと考えられるが、規模は不明である。

遺跡の性格

当遺跡で確認された弥生時代の墓地は中期と後期に属するものである。後期の墓地は徳永川の上遺跡でも発見されているが、その内容はやや異なるものである。徳永川の上遺跡の場合、墓地は一〇基以上の墳丘墓からなり、それぞれの墳丘墓内に五—三基の埋葬施設が営まれていた。また、中心的な埋葬施設には銅鏡・装身具・鉄製品などが豊富に副葬されていた。しかし、北垣遺跡の場合、南部で方形周溝墓が一基検出されたが、全体としては集団墓の傾向を示し、副葬品も若干の鉄製品と玉類が一部にみられるにとどまった。これらのことから、当遺跡に葬られた人々は節丸地域の一集落の代表者程度のものであろう。

六 居屋敷遺跡

この遺跡は、神手遺跡・徳永川の上遺跡などと同様に祓川右岸の段丘上にある。田中から徳永へ通じる町